

マレガ・プロジェクトにおける 日本の古文書の調査方法について

アンヘラ・ヌーニェス＝ガイタン
(訳：湯上 良)

はじめに

バチカン図書館が所蔵するフォンド・マレガ（「マリオ・マレガ資料」）は、日本国外で保存されているもっとも大規模な記録資料群の一つであることが明らかになった。西洋の他機関は、豊かな日本関連のコレクションを誇るが、それらは主として美術作品によって構成されている。一方、マレガ資料は、基本的にアーカイブズ資料から構成されている。このフォンドは、われわれが扱っている慣れている物品に比べ、一般的なアーカイブズ資料が持ち合わせる多様性と特殊性を備えているため、「多様で、特殊な」紙の修復に従事することになった。

本稿ではマレガ・プロジェクトの概要調査について伝えることとする。とくに日本の歴史資料と保存・修復に関する理論的・実践的知識を深めることが期待されるものである。

はじめに、マレガ資料とその歴史について、大まかに説明する。

1. マリオ・マレガ資料群

マリオ・マレガ（1902～78）は、1930年代から日本に滞在したサレジオ会の宣教師である。彼はこの時期、寺院で放棄されていたり、古物商に売り払われたりした古文書を収集しながら、日本のキリシタンについて研究し、著述していた。マレガは、こうした古文書をイタリアに送り、いくつかの出来事後、より重要な文書群がバチカンに到着した。主に豊後国（現在の大分県臼杵）のキリシタン迫害に関するもっとも古い日本語の原文書は、17世紀初頭にさか

のぼるものであり、そのなかには江戸時代の日本の手書き文書も含まれている。バチカン図書館書庫の最初の総合的な整理の後（いくつかの手書き文書は、すぐにフォンド「*Vat.estr.or.*〈バチカン極東文書〉」のなかに入れられた）、文書群は忘れ去られていた。これはおそらく、こうした文書の読解には、多くの人が持たない日本語古文書学の専門知識を必要とするためであろう。マレガ資料は、2011（平成23）年3月にバチカン図書館で再発見された。A書庫で見つかり、その時点では1964（昭和39）年にラテン部門のスクリプトール〈書記官 *scriptor latinus*〉のマリー＝イヤサント・ローラン（Marie-Hyacinthe Laurent, 1906～68）が割り振った21袋に分割されていた。

このフォンドは、日本のキリシタン史にとってのみ重要なわけではなく、この時代の人口統計学的文化的な組み立てのうえでも基本的な資料となり、広く歴史学的な重要性を有する。キリシタン迫害は、イデオロギー的・宗教的要素を口実としたが、主として政治的動機から行われた。なぜなら、キリスト教の布教は、将軍によって確立された封建体制を何らかの形で転覆させる恐れがあったためである。幕府はキリスト教を禁じたが、統制の適用方法の決定権を「大名」と呼ばれた地方の封建領主に任せた。統制は、家と慣習に関して、詳細かつ広範な社会統制を目的とした村の記録類を通じて行われた。それらは、世代を超えて正確に記述された。したがって、これらの記録からは、17世紀初頭からの日本で実行されていた封建社会の社会的な断面図を読み取ることが可能であり、日本の江戸時代の歴史研究にとって貴重な情報を提供する。

まさにこうした記録類がバチカンのマレガ資料を構成し、その総点数は1万1000点以上にも及ぶ。

2. マレガ・プロジェクト

プロジェクトの初期の段階から、この「多様で、特殊な」アーカイブズ・フォンドの概要目録や詳細目録の作成に力を貸してくれる日本の機関との協力関係が必要なことは明白であった。そこで京都のイタリア東方学研究所（ISEAS）の所長シルヴィオ・ヴィータ教授を通じ、国や地方のアーカイブズ関連機関や

大学、図書館など日本の諸機関との接触が行われた²⁾。

プロジェクトの計画は、2013（平成25）年9月から始まったフォンドの概要目録の作成・修復・デジタル化というバチカンでの第1段階と、デジタル化された画像データから詳細目録を日本で作成する第2段階とで構成された。

2013年9月、概要目録のプロジェクトの第1段階が開始され、最初の日本からの作業グループをバチカン図書館の修復部門に迎え入れた。プロジェクトにおけるバチカンでの段階は、2019（令和元）年に日本チームの概要調査がほぼ終了し、文書のデジタル化は翌2020年に完了した。

3. 概要調査

最初の作業では、21袋の配列に配慮しながら、特殊なプラスチック製の袋の中に対象物を入れ、無酸素システムを用いて、すべてのアーカイブズ・フォンドの虫を駆除する処置を行った（写真1）。

つぎに資料の概要目録を作成する段階に進む。日本からの作業グループとともに作業したこの数週間は、作業工程すべての基礎となる。高度に組織化され、合理化された手法を用いた、鮮やかな仕事ぶりが印象的であった。

整理番号の構築を含む、基準の策定に取り組み、アーカイブズを全体として捉え、各要素の配置が完璧な形で投影されるように基準を定めた。したがって



写真1 無酸素システム

整理番号は、段階ごとに整理され、階層構造のイメージから生まれた数値配列によって構成されている。各数値は取り上げ段階の大きなまとまり、すなわち後述する「容器」か「包み」を表し、概要目録化を行った際に発見された正確な順番を反映している。整理番号の配列を確認するならば、完全な形で調

査以前の資料状態を再構築できることになる。

整理番号の最初の要素は、バチカン図書館の司書を務めていた前述のマリー＝イヤサント・ローランが整理し、文書を入れた袋や容器に対応している（A1、A2、A3から始まり、A21まで）。しかし、これはまったく独断的な基準に基づくものであり、アーカイブズの元の構造を反映していない。元の配列は、すでにアーカイブズを発送する際や輸送する間、決定的に変更されてしまったのだ。このような明らかな制約にもかかわらず、われわれのシステムはアーカイブズが再発見されたときの状況を反映させ、さらにコレクションの歴史全体における正確な瞬間を表しており、これは保存されるべきものである。臼杵藩の書類袋の事例に見られるように、幸運にもいくつかのアーカイブズ・ユニットは、体系だった形で保存された元のアーカイブズ・ユニットと対応しているものもある（写真2）。



写真2 臼杵藩の包紙

つぎに、資料の概要目録の作成にも取り組んだ。その作業の流れは、考古学の発掘調査のように、発見された資料を正確に撮影することから始まり、資料の法量も測られた。概要調査の状態写真は、バチカン図書館で再発見されたときに見られた文書一つ一つの位置関係を再現するこ



写真3 バチカン図書館の保存室で働くマレガチーム

とを可能とする（写真3）。

つぎに、文書が手から手へ受け渡され、中央の机に運ばれ、そこで文書の種類・寸法・中身に関する簡単な備考・日付・言語・保存状況など、いくつかの基礎的な情報がエクセル・ファイルに記録された。こうした一連の作業は、バチカン図書館の人員によってオリジナル文書の上部に、鉛筆で整理番号を付されることで終了する。

日本とヨーロッパの間には、各文書への整理番号の付し方に違いがあり、その方法を巡って、発見と衝突を伴う最初の問題が発生した。日本では、整理番号は文書上ではなく、小さなラベルに書かれた後に糊で貼り付けられる。したがって、いつでも状態復帰が可能である。この方法では、外来の要素が元の文書上に入り込むことを防げる。それに対して、和紙の繊維構造は、鉛筆の鉛の成分を引き留めるので、いったん和紙に鉛筆書きをすると、それを再び取り去るのは難しく、結果的に元の文書の改変を引き起こす可能性がある」と、バチカン図書館側に日本の同僚たちは説明してくれた。しかし、バチカン図書館は、作業速度・実用性・安全性という3つの本質的な理由から、元の文書の上に直接、整理番号を書き込むことを決断した。なぜならば、鉛筆書きは、容易に消せないことは明らかだが、日本の仕組みもラベルを剥がす際に、紙の繊維の中に糊の残骸が残り、元の文書に小さな改変をもたらす可能性がある。バチカン図書館は、こうした点を考慮した結果、直接鉛筆で番号を書き込む決断に至った。

目録化に関連する選択に付随して、西洋のアーカイブズとは形態上かくも異なる、東洋のアーカイブズを長期的に運用・保存する上での問題に直面した。新しい種類の素材や用語を学習しなければならなかったし、漢字を習得しようという素朴な挑戦もした。さらにマレガ資料は、均質なものではなかった。大部分の文書は、「状」と呼ばれる、巻かれて潰されたものから構成され、長さ20m以上の巻物もあり、「帳」と呼ばれる帳簿や、マレガが入手した何冊もの近代の書籍、さらにマレガが資料群の最初の調査とカタログ作成時に用いた包紙やばらの紙、包装用の封筒、そして最終的に輸送の際に用いられた紙（時には新聞紙）もそこに加わる。これらのうち、最後の紙は酸性のもので、中性紙によって周囲から隔離されるような処置がなされている。

初期段階で、「目の前に立ちどころ問題」だと感じられた事柄は、われわれの仕事仲間である日本の方々との、緊密かつ効果的な共同作業のおかげで解決した。作業グループの到着前に、図書館で最初に出会った段階から、青木陸³⁾氏によって提供された本質を踏まえた助言の数々のおかげで、バチカン図書館側での混乱はすぐに乗り越えることができた。青木氏は、日本でアーカイブズがどのように保存されているのかをわれわれに紹介し、保存に適した板紙の箱を携えてきた。その箱の中で各文書は、一つ一つ薄葉紙に包まれ、箱内部の長辺に沿って置かれた中性紙の資料封筒に入れられ、棚の上で平行方向に箱を並べる形になっていた。しかし棚の上で平行方向に並べる方法は、どうしても配架スペースを節減しなければならない図書館側にとって問題になった。したがって、上が開口部になるよう箱を縦に並べる方法を選択し、箱の短辺に沿って各文書を封筒に入れ立て掛け、上部の開口部から各文書の整理番号も見えるようにした(写真4)。文書に整理番号の最終版が割り振られた際、手書き文書用書庫の担当者は、箱の中に資料封筒を入れ、各箱に入れてある文書の整理番号の最初と最後の番号を付け加えた。さらに各文書は、資料封筒の右側と左側へ交互に並べられ、厚みの分のスペースを節約することになる(写真5)。もちろん、文書を包む用具は中性紙で作られており、長期保存のために最適化されている。書籍や文書で規格外のものは、箱の短辺に沿って平行に入れられた。

もう一つの懸案は、書庫内部のアーカイブズ・フォンド全体について正確に全量を予測することである。まだ目録化作業が開始されていない段階で、予測するのは簡単なことではなかった。したがって、最初に取り組めた仕事は、資

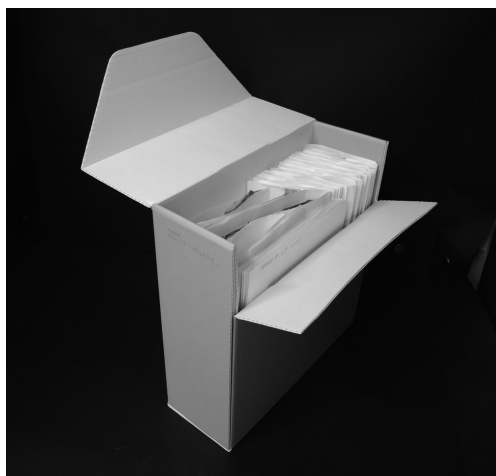


写真4 文書収納用の箱



写真5 文書収納用の箱の中の史料の配置

料群の一部から初期管理を行うことだった。残念ながらドイツで作られた箱は、誤ったサイズのもので来てしまい、日本から来る最初の作業グループの滞在日程に間に合わなかった。当図書館所蔵の手書き文書を輸送する際に通常用いる箱で

代用し、箱の中に厚紙の仕切りを入れることで応急処置をした。この方法は、最終的に修復部門の狭い空間で作業をする上で、きわめて理に適っていることが明らかになり、後の作業段階にも適したものであった。

21袋分の文書は日本チームによって概要目録化された。また、教皇庁立サレジオ大学からマレガの古文書が移管され、サレジオ大学とバチカン図書館との間の協定のおかげで、サレジオ大学にあるファンドもマレガ・プロジェクトにおいて概要目録化され、修復され、デジタル化された。こうして、歴史研究におけるより高度な共通の財産の恩恵にあずかり、マレガ自身によってなされた収集物の散逸を回避することになったのである。

4. 修復

バチカン図書館修復部門がより深くかかわった作業段階は、間違いなく、文書の概要調査、そしてつぎの段階の修復作業である。これは、両国の役割を補完し合う象徴的な事例である。

修復作業は、つぎの段階であるアーカイブズ・ファンド全体のデジタル化を実施するにあたっての予備作業となり、取扱い時の安全性と高品質の画像を保証する。

扱わねばならない資料の膨大な分量を考慮し、包材を修復する段階を除外し、時間を節約するようすぐに決定した。包材とは、当時の原文書の送付の目的で

用いられた紐や束ねるものとともに、マレガが使った新聞紙や梱包用の紙などがそれに当たる。

作業の初期段階で日本の作業グループは、各項目の保存状況について最初の状態評価を行った。青木氏や筆者のような修復の専門家による立ち会いのもと、処置すべき損傷の程度を0から3までの段階で分類しはじめた。0は損傷のないもの、1は軽度の損傷で修復作業の必要がないもの、2はデジタル化の前にある程度の修復作業が必要となるもの、そして最後の3は触れるだけであっても事前の修復作業が必須のものとなる。

損傷段階1に分類された対象物に注意を向けつつも、修復作業の目的とは、古い対象物を作成された時点まで戻し、ある意味で「新しく」するという考え方に基づくものではないということを強調しておきたい。そうではなく、歴史的な出来事が対象物にもたらした傷跡をも尊重しつつ、できるだけ長く利用できるよう、最小限の処置を施すことなのだ。なぜならこうした事柄は、歴史的な情報を伝えているもので、それらは研究され、解釈されることであり、またそうでなくてはならないからである。日本からの作業グループの面々も、修復でのこうした取組み方で一致していて、「同じ言語で会話する」ことが可能であった。

検証された主な損傷は、以下のとおりである。

- * 虫による損傷。損傷がより激しい事例では、文書のさまざまな部分が虫の侵入や分泌物によって、紙を開いた際、互いに付着していた（写真6）。
- * カビなどの微生物による腐食。これらは、フェルトのように紙が固くなり、部分的に失われた状態を引き起こし、最終的には欠損をもたらす。日本語で「フケ」と呼ばれる。
- * 虫食いによる損傷。欠損し、しばしば溜まってシミになることもある。
- * 放置された湿気による損傷。結果的にシミとなるか、巻物が互いに付着するか、開封や巻きを広げるのが非常に難しくなり、巻物が固まる（写真7）。
- * 巻物を形作る紙の継ぎ目が付着した部分の糊剝がれ。
- * 力学的な損傷。主に文章についた折り目によって、デジタル化された画像において、文章が完全には読めなくなっている。



写真6 虫による損傷



写真7 湿気により損傷を受け、互いに付着した巻物

しばしば複数の種類の損傷が同一の文書に併存しているが、最も頻繁に見られる損傷は、虫によるものである。しかしながらマレガによって利用されたツツミ紙には、このようなダメージの形跡は見られず、虫による損傷は船による輸送の準備より前に発生したことは明らかである。

パチカン図書館が実施している、すべてのデジタル化プロジェクトにおける実務作業と同じように、一つ一つの文書は保存状態が記録され、安全にデジタル化作業を行うため、適宜修復作業が施され、修復部門を通過していく。マレガ・プロジェクトも例外ではなく、修復士は、修復作業

を随時行うため、デジタル化の前に一つ一つの文書を点検する。

日本の資料が西洋のものとは大きく異なるという点については、一つ前置きをせねばならない。まず、筆記媒体の種類は、日本においては紙が絶対的に優位な地位にある一方、西洋では羊皮紙も見られる。しかし、「和紙」と呼ばれる日本の紙は、楮などを原材料とし、質の悪い昔の洋紙とは似ても似つかぬものである。繊維はより長く、強いので、薄い紙も作ることができる。しかも力学的な強度は非常に高い。筆記する際の「媒体」も異なり、日本では墨を用いるが、西洋では没食子^{もっしょくし}インクの利用がほぼ支配的となっている。

洋紙を扱う西洋の修復士は、紙を修復する際に工場生産された和紙を用いる

こともあるため、扱いは慣れているものの⁴⁾、[工場生産された和紙とはまったく異なる品質である] 昔の手書き文書用の和紙を扱う際は、同じように扱うことはできない。

さらに、形状や特性に関しても、異なるアーカイブズ資料に向き合うこととなった。優秀な修復士は、見かけ上は平凡であっても、実際には手工業の歴史において基本的な各要素を認識できるような、歴史に関する知見を備えていなければならない。西洋のアーカイブズの事例でも、封印された手紙を開封する際、取り扱った封蠟を再度統合しないように注意を払う。さて、この点でも新たな問題に直面することになる。日本の文書史料で、守り伝えねばならぬ要素とは、どのようなものだろうか。

バチカン図書館が処置を行わねばならない日本のアーカイブズ資料に関して、材料学や書籍学的観点から関連研究を明確に理解しなければならなかったため、マレガ収集文書の修復を目的とした特別な研修が必要となった。金山正子氏と青木陸氏を責任者として開催された、3週間の修復に関する専門家同士の交流などの素晴らしい機会に恵まれた。3週間という期間は、短く感じるかもしれないが、すでに基礎教育を受けた修復士同士がやり取りをしたため、教える側にとっても、教えられる側にとっても迅速に事が運んだ。彼女たちが日本に戻った後も、バチカンの修復士たちは、デジタル化の前にすべてのアーカイブズの修復を行った。

多くの経験を積み、包容力に富んだ2人とともに働くことは、欠損の修復、裏打ち、損傷を受けた状物を開く方法など、修復に関する新しい手法や技術とともに、さまざまな素材に対応できる力をバチカン図書館側に与えてくれた。

資料に直接触れることを通じてバチカン図書館側は、洋紙と比較して和紙が修復作業に対して、きわめて異なる反応を示すことを理解した。たとえば、シミを作る危険を引き起こさず、和紙に水分を用いた作業を行うといったことなどが挙げられる。このことは、和紙が洋紙のように紙の形成過程の最終段階で表面に糊を入れないという理由から説明ができるかもしれない。洋紙と違い和紙は、漉く前にトロロアオイから抽出された粘着性のある液体を水に加え、それが繊維をつなぎ留めることを助け、繊維を密な状態にさせるのだ。

バチカン図書館側は、日本の文書史料の特殊な要素について認識し、学んだ。たとえば、状物の最初の端にある小さな切込みは、状物自体を封じるためにあえて切られたもので、再接合してはいけないこと。または、日本のアーカイブズにも主題に沿ってまとめられ、異なる大きさの文書を綴る習慣があり、これは、バチカン図書館のアーカイブズ・ファイルで見られるものから、さほど遠いものではないことが理解できた。

つぎのような共同作業を行った。

- *レーヨンと水／布海苔を用いた、「状」の開封。状物同士が付着している場合はとくに注意を要する（写真8）。状物を開けることができなかつた部分は、和紙同士が硬化し貼り付いている。
- *虫による深刻な損傷が見られる「状」の開封と、複数の階層にわたって断片化した部位の再配置。ある種の「考古学的な発掘調査」ともいえる、階層を特定する作業の基本的な事項として、「状」が他の「状」に巻き込まれている際、状物自身がどのように折られていたのかという点に注意を払う。これは、帯状の紙を貼り付け、文章の特定の場所に注釈を付ける場合も同様である。断片を再配置する作業は、非常に複雑である。虫由来のシミや動いた跡などが、しばしば損傷と、該当する箇所正しい位置を特定する助けになる。しかし、より複雑な事例では、日本語を母語とする方々の力を借りなければ



写真8 レーヨンと水を用いた状の開封

ならなかつた。日本からの作業グループが滞在していないときは、松浦一之介氏の力を借りた。彼は、デジタル化の全過程においてプロジェクトに協力してくれた。

- *裏打ちは、より深刻な場合のみ、「状」のオリジナルの折り目に注意しながら行われる。私たちの

作業傾向には、西洋の教育が強が残っている。したがって私たちは、文書に不要な力がかからないように注意しつつ、全体的な裏打ちよりも欠損部分を塞ぐことを優先した。

*紙や薄葉紙で欠損部分を修繕する場合は、筆と水を用いて欠損

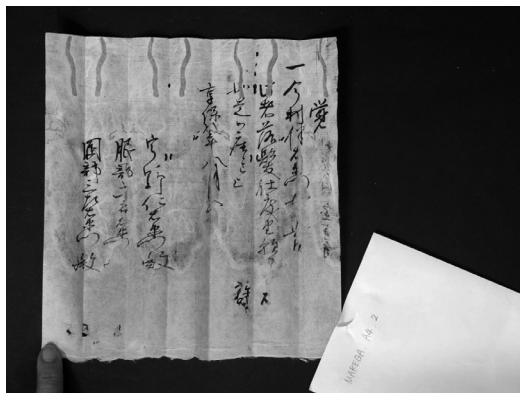


写真9 欠損部分の修繕

部分を埋め、形を整える（写真9）。バチカンの修復士の何人かは、薄葉紙よりも薄い紙を使ったが、より厚い紙を用いた方がよかったのではないかと再考した。こうした失敗は、できるだけ最小限の介入作業を行おうとする癖がついているため、起こりうるのだ。

さらに、書籍のページの欠損部分を修繕する場合、日本の書籍における紙の特別な構造を加味しつつ、ページの表と裏を区別することを常に想定している。わずかな事例で、澱粉糊ではなく、アルコール・ベースの接着剤（クルーセルG）を用いた。

*巻物の継ぎ目の再接合。

*文書上の折り目を正すときは、ポリエステル製の薄い皮膜であるマイラーで覆われた鉄のテーブルの上で、紙に包まれた磁石を用いて羊皮紙の^{しわ}皺を取るという、バチカンの技術を用いた。

5. デジタル化作業

修復作業の後、プロジェクトにおいて不可欠なつぎの作業段階は、資料のデジタル化である。画像を通じて、日本での資料の詳細目録の作成も可能となる。デジタル化作業は、図書館内にある修復部門の2階上で行われ、必要な場合に

は、写真家と修復士の間で意見交換ができた。A1からA26に至るデジタル画像総数は4万コマに及んでいる。

おわりに

マレガ・プロジェクトは、東洋と西洋の間で互いに絶え間なく影響し合うものであるが、ある特定の題材だけでなく、広い意味での「歴史」に従事する、さまざまな専門家たちによる学際的な事例であり、模範的なものでもある。この作業グループのなかで修復士は、資料が受け継いでいる歴史的特殊性を守る者として役目をおい、このことから、取り扱うべき物品の歴史を完全に理解する義務がある。

結論の前に、人間的な要因という、しばしば無視される要素に言及しなければならない。このプロジェクトは、専門的な観点から一点の曇りもない一つの挑戦だったが、人間的な要因が基本的な役割を果たしてきたものであり、今もそれが機能している。わたしは飽くことなくこの点を強調するが、人間的な要因なしには、プロジェクトに必要とされる落ち着いた状況で仕事を行うことは決してできなかったはずである。

註

- 1) 『イタリア学術・文学・芸術百科事典』(*Enciclopedia Italiana di Scienze, Lettere ed Arti*)によれば、マリー＝イヤサント・ローラン (Marie-Hyacinthe Laurent、マルセーユ1906-ローマ1968) は、ドメニコ会士、中世歴史家、古文書学者。1934年から1946年までバチカン文書館に、その後1949年から1968年にはバチカン図書館に務めた。主たる研究分野は、イタリア、プロヴァンス、ナポリ王国の中世である。また、文書群を公開し、1135年から1266年のバチカンのラテン語写本のカタログを編集した。シエナの聖カタリナの研究者でもあり、1935年からシエナ大学で聖カタリナ研究の講師を務めた。
- 2) 国文学研究資料館、東京大学、京都外国語大学、早稲田大学、国立歴史民俗博物館、大分県立先哲史料館、元興寺文化財研究所等から構成されるグループ。
- 3) 国文学研究資料館准教授。
- 4) すでに触れたが、耐久力については中性紙の方が値が高く、したがって酸性紙とは異なるものであるという利点が考えられる。なぜならば、製造過程において、繊維の抽出を進めるために、沸騰した時点で、伝統的に木の灰などのアルカリ性の物質が加わるからである。
- 5) 元興寺文化財研究所研究員。